

## 体育授業における達成目標の接近回避傾向と動機づけの関係

藤田 勉〔鹿児島大学教育学部（保健体育）〕

### Relationship with a tendency toward approach-avoidance of achievement goals and motivation in physical education

FUJITA Tsutomu

キーワード：達成目標理論、達成動機づけ階層モデル、有能感、運動意欲、スポーツ

#### 1. はじめに

体育授業では、運動が上手くできずに諦めて意欲を失う子どもがいる一方で、たとえ失敗を繰り返しても努力し続ける子どもがいる。この両者の違いを達成目標理論（Dweck, 1999; Nicholls, 1989; Elliot & McGregor, 2001）の立場では、有能さを希求する（上淵, 2004）ことを前提とした目標の捉え方に着目する。体育授業の場面で例えると、何かを達成しようとする場面において、熟達すること、学習すること、努力することを目標とする課題目標（熟達目標や学習目標とも呼ばれる）と他者に優れること、他者に能力を誇示すること、他者よりも少ない努力で成功することを目標とする自我目標（成績目標や遂行目標とも呼ばれる）という達成目標の持ち方あるいは考え方によって行動パターンが異なってくるというものがある。

体育・スポーツ心理学では、Nicholls（1989）が提唱した課題志向性（努力したこと、熟達したことを成功あるいは有能と捉える傾向）と自我志向性（他者より優れること、他者より少ない努力で実行することを成功あるいは有能と捉える傾向）という個人傾向としての達成目標とされている目標志向性に関する研究が数多く行われてきた。Biddle et al.（2003）は、システムティックレビューにより、課題志向性の方が自我志向性よりも動機づけに対して適応的であることを示した。しかしながら、必ずしも全ての研究において結果が一致しているわけではなかった。Duda & Hall（2001）は、目標志向性と諸変数の関係について、研究結果の不一致を報告しており、単純な相関関係の検討ではなく、関連要因を媒介変数や

調整変数などにして分析することを推奨したが、どの分析方法が適切であるかを明確にしておらず、分析方法を吟味した研究も行われていない。その他にも、遂行目標（自我目標に相当）と諸変数の関連を検討した研究結果の不一致について、村山（2003）は、有能さによる解釈、多目標視点による解釈、個人差変数による解釈などが考えられながらも、いずれも問題を解決するには不十分であるとしている。

近年、これらの問題を解決できると考えられているモデルとして、Atkinsonの達成動機づけ（Atkinson & Feather, 1966）に基づく達成動機づけ階層モデル（Elliot & McGregor, 2001）が提唱され、体育・スポーツ心理学においても研究が始められるようになった。このモデルでは、有能さの定義（definition）と有能さの価（valence）の組み合わせによって、熟達目標（課題志向性に類似した概念）に接近と回避の2側面、成績目標（自我志向性に類似した概念）に接近と回避の2側面を仮定し、熟達接近目標、熟達回避目標、成績接近目標、成績回避目標という4種類の達成目標が概念化されている。熟達接近目標では、熟達させることや以前よりも能力を伸ばすこと、熟達回避目標では、熟達できないことを避けること、成績接近目標では、他者と比較して優れることや能力を誇示すること、成績回避目標では、他者と比較して劣ることを避けることが目標とされている。

体育・スポーツ心理学における達成動機づけ階層モデルに関する研究は、スポーツに参加する大学生を対象としたConroy et al.（2003）の尺度開発を皮切りに研究が行われるようになった。体育

授業においては、Wang et al. (2007) が、シンガポールの児童生徒を対象として体育授業用の達成目標尺度を作成し、尺度の信頼性及び妥当性を検討した。この研究では、尺度の基準関連妥当性を検討するために動機づけ関連要因との相関関係や因子不変性の検討などが行われ、西洋文化の国以外においても、適用可能であることが示された。また、Barkoukis et al. (2007) は、サマースポーツキャンプに参加した青少年を対象として、熟達目標（熟達接近目標に相当する。この研究では、熟達回避目標は仮定されなかった）、成績接近目標、成績回避目標の3種類の達成目標と目標志向性の比較検討を行ったところ、熟達目標から、内発的動機づけ及び同一化的調整へ正の影響、外的調整及び非動機づけへ負の影響が示され、成績接近目標から、取り入れの調整へ正の影響が示され、成績回避目標から同一化的調整、取り入れの調整、外的調整へ正の影響が示された。しかしながら、達成目標と動機づけ関連要因の相関関係あるいは影響関係を検討することのみよりも、達成目標を規定する要因を仮定し、なぜ、達成目標が高くなるあるいは低くなるのかを明らかにすることを含めた研究の方が体育授業への応用を考えた場合により有用であると考えられる。

Nien & Duda (2008) は、スポーツ選手を対象として、「有能さ・失敗への危惧→達成目標→動機づけ」という仮説モデルを検討した。これは、達成動機づけの階層モデルの考え方をスポーツ場面へ応用したものであり、接近傾向を意味する有能感と回避傾向を意味する失敗への危惧が最も下位の階層に位置づけられ、その次に、達成目標のそれぞれが設定され、内発的動機づけ、外発的動機づけ、非動機づけへ影響するという順序性を持つという意味の階層構造が検討された。その結果、有能感からは、熟達接近目標及び成績接近目標へ正の影響が示され、失敗への危惧からは、熟達回避目標、成績接近目標、成績回避目標へ正の影響が示された。そして、熟達接近目標からは、内発的動機づけへ正の影響、非動機づけへ負の影響が示され、熟達回避目標からは、非動機づけへ正の影響が示された。成績接近目標からは、外発的動機づけへ正の影響が示された。成績回避目標

からは、非動機づけへ負の影響が示された。

しかしながら、Nien & Duda (2008) は、本来、同一化的調整、取り入れの調整、外的調整という自律性の程度により分類されている自己決定理論 (Deci & Ryan, 1985, 1991) に基づく外発的動機づけの各概念を合成して分析しており、各達成目標と各外発的動機づけの関係を明らかにできなかったことを課題として挙げている。外発的動機づけの中でも、同一化的調整のような自律性の程度が高い外発的動機づけは、内発的動機づけと共に適応的な動機づけであることが示されていること (Lim & Wang, 2009)、また、Barkoukis et al. (2007) では、熟達目標から、同一化的調整へは正の影響が示され、外的調整へは負の影響が示されていることからすると、各達成目標から各外発的動機づけの関係はそれぞれ異なってくると考えられる。

そこで本研究では、体育授業における達成動機づけ階層モデルを検討し、達成目標（熟達接近目標、熟達回避目標、成績接近目標、成績回避目標）と動機づけ（内発的動機づけ、同一化的調整、取り入れの調整、外的調整、非動機づけ）の関係性を明らかにする。本研究の目的を達成するための手順としては、体育授業用の達成目標尺度及び動機づけを測定する尺度を作成し、その後、「有能感・失敗への危惧→達成目標→動機づけ」という因果モデルを検討する。

## 2. 方法

### 1) 調査方法と調査対象

K県内都市部における小学校17校の5年生915名（男子449名、女子466名）と6年生918名（男子467名、女子451名）、計1833名（男子916名、女子917名）を対象とした質問紙調査を行った。調査の協力を依頼した各学校へは調査票を郵送し、各学校では、ホームルーム等の時間を利用し、クラス担任の教員から各児童へ配布され、回答が行われた。調査票は回答終了後、郵送にて回収された。

### 2) 質問項目

#### ①有能感・失敗への危惧

Nien & Duda (2008) と同様、McAuley et al.

(1989)の有能感尺度を参考にして4項目、Conroy et al. (2002)の失敗への危惧尺度を参考にして4項目、計8項目を作成した。

②達成目標

Conroy et al. (2003)やWang et al. (2007)によって作成された達成目標尺度を参考にして、熟達接近目標3項目、熟達回避目標3項目、成績接近目標3項目、成績回避目標3項目、計12項目を作成した。

③動機づけ

Pelletier et al. (1995), Mullan et al. (1997), Ntoumanis (2001)によって作成された動機づけ尺度(運動をする理由をたずねる項目)を参考にして、内発的動機づけ4項目、同一化的調整4項目、取り入的調整4項目、外的調整4項目、非動機づけ4項目、計20項目を作成した。

3) 統計解析

質問項目の分析として、探索的因子分析及び検証的因子分析により尺度の妥当性を検討し、尺度の信頼性の検討として内的整合性(α係数)を求めた。各尺度の基本統計量(平均、標準偏差)、相関行列、α係数の算出には、SPSS12.0を使用した。因果モデルの検討には構造方程式モデリングを行った。検証的因子分析及び構造方程式モデリングを行う際には、AMOS5.0を使用し、最尤法により母数の推定値を求め、GFI, CFI, RMSEAをモデル適合度指標とした。

3. 結果

1) 質問項目の分析

①有能感・失敗への危惧

有能感4項目、失敗への危惧4項目、計8項目について探索的因子分析を行い、初期の固有値が1.0以上であること、因子負荷量が0.4以上であること、解釈可能な因子構造になることを条件として分析したところ、有能感4項目、失敗への危惧4項目の2因子で構成された(表1)。この因子構造について検証的因子分析を行ったところ、GFI=.976, CFI=.973, RMSEA=.068という良好な適合度指標が示された。次に、尺度の信頼性の検討として、内的整合性を求めたところ、有能感が、α=.88, 失敗への危惧が、α=.78であり、両尺度とも満足する水準であった。

②達成目標

熟達接近目標3項目、熟達回避目標3項目、成績接近目標3項目、成績回避目標3項目、計12項目について探索的因子分析を行い、初期の固有値が1.0以上であること、因子負荷量が0.4以上であること、解釈可能な因子構造になることを条件として分析したが、各3項目で構成される4因子構造にはならなかった。そこで、因子数を4つに固定し、再度分析を行い、熟達接近目標3項目、熟達回避目標3項目、成績接近目標3項目、成績回避目標3項目で構成される4因子構造で解釈した(表2)。この因子構造について検証的因子分析を行ったところ、GFI=.977, CFI=.970, RMSEA=.049という良好な適合度指標が示された。次に、尺度の信頼性の検討として、内的整合性を求めたところ、熟達接近目標尺度が、α=.81, 熟達回避目標尺度が、α=.73, 成績接近目

表1. 探索的因子分析の結果(有能感及び失敗への危惧)

		1	2
有能感 (α=.88)	ほとんどの運動は器用にできる.	<b>0.843</b>	0.061
	自分の運動能力は高いと思う.	<b>0.825</b>	-0.027
	運動をすることは得意な方だ.	<b>0.809</b>	-0.039
	与えられた課題はすぐにできるようになる方だ.	<b>0.727</b>	0.006
失敗への危惧 (α=.78)	失敗したときは、みんなが私をどう思っているか気になってしまう.	0.066	<b>0.785</b>
	失敗したときは、みんなから相手にされなくなりそうで心配だ.	0.044	<b>0.751</b>
	失敗したときは、みんなに迷惑をかけてしまうような気がする.	0.001	<b>0.656</b>
	失敗したときは、自分には運動をする才能がないと思ってしまう.	-0.195	<b>0.522</b>

表2. 探索的因子分析の結果 (達成目標)

		1	2	3	4
熟達接近目標 ( $\alpha = .81$ )	上達するためには全力を尽くすことが重要だ.	<b>0.823</b>	-0.016	0.065	-0.036
	できる限りの努力をすることが重要だ.	<b>0.777</b>	-0.039	0.031	-0.013
	自分の持っている全ての力を出し切ることが目標だ.	<b>0.720</b>	0.045	-0.092	0.031
熟達回避目標 ( $\alpha = .73$ )	やってみたいことが上手くできるかどうか不安になる.	-0.008	<b>0.757</b>	-0.067	0.006
	できる限りのことをやりこなせるか心配になる.	0.042	<b>0.701</b>	0.014	-0.042
	今までできたことができなくなってしまうような気持ちになる.	-0.060	<b>0.567</b>	0.124	-0.004
成績回避目標 ( $\alpha = .83$ )	他の人より下手なところはかくしておきたい.	0.023	-0.054	<b>0.851</b>	-0.034
	苦手なところを他の人に見せないようにしたい.	-0.016	0.053	<b>0.793</b>	0.003
	他の人より劣っているところは知られたくない.	0.003	0.228	<b>0.548</b>	0.072
成績接近目標 ( $\alpha = .65$ )	競争する相手を負かすことは重要なことだ.	-0.136	-0.052	0.000	<b>0.648</b>
	他の人よりも優れることは重要なことだ.	0.032	-0.010	0.044	<b>0.624</b>
	他の人と比較して上手くなることが目標だ.	0.140	0.045	-0.052	<b>0.591</b>

表3. 探索的因子分析の結果 (動機づけ)

	「私が体育授業で運動をする理由は、～」	1	2	3	4	5
同一化的 調整 ( $\alpha = .86$ )	運動をしていれば、健康を保つことができそうだから.	<b>0.828</b>	0.011	-0.010	0.012	0.033
	健康的な生活を送るために、やっておいた方だ良いから.	<b>0.797</b>	0.013	-0.024	0.056	-0.019
	病気になるために体調を整えておきたいから.	<b>0.765</b>	0.034	0.043	-0.086	-0.015
	体力をつけて、体調をくずさないようにしたいから.	<b>0.715</b>	-0.055	0.004	0.013	0.012
非動機づけ ( $\alpha = .85$ )	よく分からない。練習をしても運動が上達するとは思えない.	0.017	<b>0.878</b>	0.045	-0.076	0.046
	よく分からない。目標を決めても上手くできる感じがしない.	-0.051	<b>0.780</b>	-0.047	0.056	0.081
	よく分からない。運動をすることが時間の無駄のように感じる.	0.014	<b>0.705</b>	0.013	0.005	-0.107
	よく分からない。運動をすることにあまり興味を感じていない.	0.033	<b>0.663</b>	-0.035	0.054	-0.076
取り入的 調整 ( $\alpha = .81$ )	運動をすると、少しは格好良かった感じがするから.	0.002	-0.008	<b>0.919</b>	-0.077	-0.073
	運動をしていれば、何とか格好がつきそうだから.	0.026	0.010	<b>0.768</b>	0.068	-0.052
	他の人より運動が上手いと、良い気分になれるから.	-0.072	-0.015	<b>0.582</b>	0.032	0.142
	他の人より体力があると、気分良く生活できそうだから.	0.083	-0.005	<b>0.500</b>	0.104	0.101
外的調整 ( $\alpha = .76$ )	他の人と同じことをしないと、気まずい感じになりそうだから.	-0.029	0.014	-0.064	<b>0.826</b>	0.003
	他の人と同じことをしないと、さびしい感じになりそうだから.	-0.048	-0.025	0.043	<b>0.748</b>	-0.011
	運動をしないと、くらすの雰囲気になじめなくなるから.	-0.028	0.050	0.090	<b>0.567</b>	-0.016
	運動をしないと、授業についていけなくなりそうだから.	0.114	-0.012	0.017	<b>0.544</b>	-0.007
内発的 動機づけ ( $\alpha = .82$ )	夢中になって運動をするときの感覚が気持ち良いから.	-0.083	0.029	0.121	-0.054	<b>0.763</b>
	運動ができたときの喜びを味わいたいから.	-0.021	0.004	0.006	-0.024	<b>0.730</b>
	一生懸命に運動をしたときの達成感を体験したいから.	0.048	-0.063	-0.052	0.057	<b>0.723</b>
	運動をする中で新しい発見をすることができるから.	0.145	-0.023	-0.041	0.006	<b>0.633</b>

標尺度が、 $\alpha = .65$ 、熟達回避目標尺度が、 $\alpha = .83$ であった。成績接近目標尺度が若干低い値であったが、全体的にはほぼ満足する水準であった。

### ③動機づけ

内発的動機づけ4項目、同一化的調整4項目、取り入れ的調整4項目、外的調整4項目、非動機づけ4項目、計20項目について探索的因子分析を行い、初期の固有値が1.0以上であること、因子負荷量が0.4以上であること、解釈可能な因子構造になることを条件として分析したところ、内発的動機づけ4項目、同一化的調整4項目、取り入れ的調整4項目、外的調整4項目、非動機づけ4項目の5因子で構成された(表3)。この因子構造について検証的因子分析を行ったところ、GFI = .951, CFI = .952, RMSEA = .051という良好な適合度指標が示された。次に、尺度の信頼性の検討として、内的整合性を求めたところ、内発的動機づけ尺度が、 $\alpha = .82$ 、同一化的調整尺度が、 $\alpha = .86$ 、取り入れ的調整尺度が、 $\alpha = .81$ 、外的調整尺度が、 $\alpha = .76$ 、非動機づけ尺度が $\alpha = .85$ であり、いずれの尺度も満足する水準であった。

### 2) 各尺度の基本統計量と相関行列

各尺度の基本統計量と相関行列を表4に示した。動機づけ尺度について、Vallerand (1997) や Vallerand & Fortier (1998) は、外発的動機づけであっても自律性の程度が高い同一化的調整については、結果要因と正の関連があるとしており、Ntoumasni (2001) では、同一化的調整と努力に正の相関が示されている。そこで本研究においても、努力を測定する項目(運動をするときは常に全力で取り組んでいる)を作成し、各動機づけとの相関を求めた。その結果、努力は、内発的動機づけ、同一化的調整、取り入れ的調整と弱から中程度の正の相関があり、外的調整及び非動機づけと弱から中程度の負の相関があった。これらのことは、Vallerand (1997) や Vallerand & Fortier (1998) の仮説を支持するものである。また、外発的動機づけであっても、同一化的調整、取り入れ的調整、外的調整のそれぞれと努力の相関が異なるということは、外発的動機づけという1つの変数として合成するよりも、外的調整、取り入れ

的調整、同一化的調整として分析する方が妥当な結果が示されると考えられる。

### 3) 因果モデルの検討

「有能感・失敗への危惧→達成目標→動機づけ」という因果モデルを構築し、構造方程式モデリングにより、推定値を求めた。ワルド検定により有意でなかったパスを削除することによりモデル修正を繰り返したところ、最終的には、GFI = .918, CFI = .931, RMSEA = .042という良好な適合度が示された(図1)。図に示されている推定値は、全て有意( $p < .05$ )である。

有能感と失敗への危惧には負の相関が示された。これは、有能感あるいは失敗への危惧のどちらかが高ければ、もう一方は低いことを示しているが、相関係数が、 $-.31$ という低い値であることから、有能感と失敗への危惧は、完全な2項対立という関係ではないと考えられる。有能感及び失敗への危惧から各達成目標への影響について、有能感からは、熟達接近目標( $\beta = .54$ )及び成績接近目標( $\beta = .67$ )へ正の影響が示された。これは、有能感が高い(低い)と、熟達接近目標及び成績接近目標も高い(低い)ことを示している。失敗への危惧からは、成績接近目標( $\beta = .48$ )、熟達回避目標( $\beta = .92$ )、成績回避目標( $\beta = .81$ )へ正の影響が示された。これは、失敗への危惧が高い(低い)と、成績接近目標、熟達回避目標、成績回避目標も高い(低い)ことを示している。達成目標から動機づけへの影響について、熟達接近目標からは、内発的動機づけ( $\beta = .83$ )及び同一化的調整( $\beta = .59$ )へ正の影響、非動機づけ( $\beta = -.58$ )へ負の影響が示された。これは、熟達接近目標が高い(低い)と、内発的動機づけ及び同一化的調整も高く、非動機づけは低い(高い)ことを示している。成績接近目標からは、内発的動機づけ、取り入れ的調整、外的調整へ正の影響が示された。これは、成績接近目標が高い(低い)と、内発的動機づけ、取り入れ的調整、外的調整も高い(低い)ことを示している。熟達回避目標からは、同一化的調整、外的調整、非動機づけへ正の影響が示された。これは、熟達回避目標が高い(低い)と、同一化的調整、外的調整、非動機づけも高い(低い)ことを

表 4. 基本統計量と相関行列

	平均値	標準偏差	歪度	尖度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
1 有能感	2.99	0.99	0.00	-0.54	—												
2 失敗への危惧	2.72	0.98	0.22	-0.46	-0.28	—											
3 熟達接近目標	4.05	0.89	-0.98	0.84	0.44	-0.10	—										
4 熟達回避目標	2.88	0.97	-0.08	-0.39	-0.24	0.67	-0.03	—									
5 成績接近目標	2.83	0.88	0.01	-0.03	0.36	0.15	0.23	0.17	—								
6 成績回避目標	2.68	1.02	0.19	-0.43	-0.17	0.64	-0.13	0.59	0.23	—							
7 内発的動機づけ	3.83	0.90	-0.83	0.42	0.48	-0.09	0.68	-0.02	0.23	-0.11	—						
8 同一化的調整	3.82	0.90	-0.79	0.46	0.21	0.01	0.46	0.09	0.16	-0.01	0.46	—					
9 取り入れ的調整	2.47	0.98	0.29	-0.59	0.40	0.12	0.23	0.12	0.46	0.22	0.35	0.22	—				
10 外的調整	2.42	0.89	0.30	-0.43	-0.05	0.44	-0.03	0.37	0.26	0.40	0.00	0.18	0.38	—			
11 非動機づけ	1.83	0.87	1.03	0.63	-0.37	0.29	-0.48	0.22	-0.04	0.29	-0.50	-0.24	-0.07	0.30	—		
12 努力	3.81	1.04	-0.61	-0.18	0.53	-0.15	0.64	-0.12	0.19	-0.17	0.58	0.32	0.21	-0.06	-0.45	—	

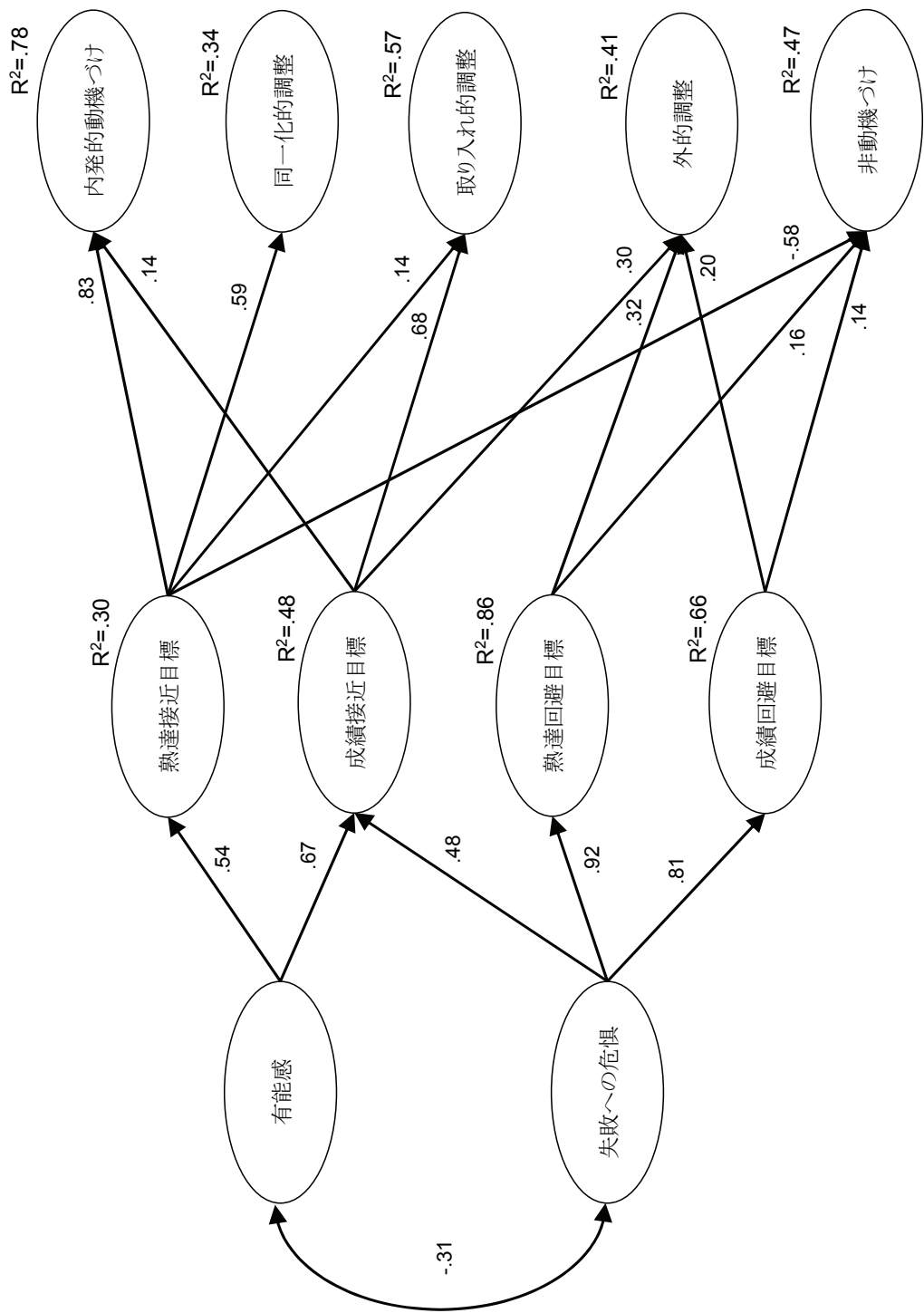


図 1. 構造方程式モデリングの結果

示している。成績回避目標からは、外的調整及び非動機づけへ正の影響が示された。これは、成績回避目標が高い(低い)と、外的調整及び非動機づけも高い(低い)ことを示している。

#### 4. 考察

本研究の目的は、体育授業において、「有能感・失敗への危惧→達成目標→動機づけ」という因果モデルを構築し、達成動機づけ階層モデルを検討することであった。

有能感から熟達接近目標及び成績接近目標を媒介して動機づけへ影響する接近傾向のメカニズムについて、有能感から熟達接近目標を介して、内発的動機づけ、同一化的調整、取り入れの調整への正の影響、非動機づけへの負の影響は、取り入れの調整への影響を除き、比較的強い影響であった。一方、有能感及び失敗への危惧から成績接近目標を介して、内発的動機づけ、取り入れ的調整、外的調整への正の影響は、取り入れの調整への影響は比較的強く、内発的動機づけへは弱く、外的調整への影響は中程度であった。熟達接近目標も成績接近目標も内発的動機づけと取り入れ的調整へ共に正の影響を示すという点は同じであったが、熟達接近目標は同一化的調整及び内発的動機づけといった自律性の程度が高い動機づけへ強い影響を示すのに対して、成績接近目標は、内発的動機づけへの影響は弱く、取り入れ的調整及び外的調整といった自律性の程度が低い動機づけへ中程度から強い影響を示すこと、また、非動機づけへの影響について、熟達接近目標からは負の比較的強い影響が示されたのに対して、成績接近目標からは有意な影響は示されなかった点が異なっていた。同じ接近傾向を持つ達成目標であっても、その種類によって動機づけへの影響に違いが生じるのは、熟達接近目標は有能感という接近傾向のみを源泉としているのに対して、成績接近目標は接近傾向を持つ達成目標でありながらも、有能感のみならず、失敗への危惧という回避傾向も源泉としているためと考えられる。

スポーツの場面ではあるが、Nien & Duda (2008)においても、有能感のみならず、有能感と負の相関関係にある失敗への危惧からも、成績

接近目標へ正の影響が示されたことからすると、本研究の結果は妥当であると解釈される。したがって、成績接近目標には、接近傾向と回避傾向の2つの側面があるために、熟達接近目標ほどの内発的動機づけへの影響力が持たず、自律性の程度が低い動機づけへの影響力が強くなるのではないかと考えられる。

失敗への危惧から熟達回避目標及び成績回避目標を媒介して動機づけへ影響する回避傾向のメカニズムについて、失敗への危惧から熟達回避目標及び成績回避目標を介して外的調整及び非動機づけへの負の影響は共に同じものであった。熟達回避目標及び成績回避目標から非動機づけへの影響については、Nien & Duda (2008)と同様の結果がであったが、本研究において非動機づけに隣接する外的調整への影響も示された点は異なっていた。これは、Nien & Duda (2008)が自律性の程度の高低に関わらず、外的調整、取り入れ的調整、同一化的調整を合成して分析したのに対して、本研究では、各外発的動機づけへの影響をそれぞれ検討したためと思われる。熟達回避目標及び成績回避目標から、全く自律していない非動機づけと正の相関関係にある自律性の程度が低い外的調整への影響が示されることは考えられることであり、本研究の結果は妥当であると考えられる。

本研究の結果から、体育授業において、努力を継続できる子どもとすぐにあきらめてしまう子どもの違いを説明すると以下のようになると考えられる。まず、努力を継続できる子どもは、運動すること自体を目的とする内発的動機づけ及び運動することに高い価値を持っている同一化的調整が高く、また、運動への価値や有能さが欠損している非動機づけが低い(運動への価値や有能さの欠損が生じてないという意味)と考えられる。そして、それらの動機づけに影響を与えているのは、接近傾向を持つ達成目標であり、特に、努力すること、熟達することを重要視する熟達接近目標の影響が強く、さらには、その熟達接近目標は有能感の影響を受けていると考えられる。一方、あきらめてしまう子どもは、他人に強制させられて運動に取り組む外的調整及び運動への価値や有能さ



が欠損している非動機づけが高い（運動への価値や有能さの欠損が生じているという意味）と考えられる。そして、それらの動機づけの影響を与えているのは、回避傾向を持つ達成目標であり、さらには、それら回避傾向を持つ達成目標は失敗への危惧の影響を受けていると考えられる。

## 付記

本研究の趣旨にご賛同し、ご協力下さいました児童の皆様、各小学校の先生方に深く感謝申し上げます。

## 文献

- Atkinson, J. W., & Feather, N. T. (1966). A theory of achievement motivation. New York: Wiley.
- Barkoukis, V., Thøgersen-Ntoumani, E. C., Ntoumanis, N., & Nikitaras-N. (2007). Achievement goals in physical education: Examining the predictive ability of five different dimensions of motivational climate. *European Physical Education Review*, 13, 267-285.
- Biddle, S. J. H., Wang, C. K. J., Kavussanu, M., & Spray, C. M. (2003). Correlations of achievement goal orientations in physical activity: a systematic review of research. *European Journal of Sport Science*, 5, 1-20.
- Conroy, D. E., Elliot, A. J., & Hofer, S. M. (2003). A 2 × 2 achievement goals questionnaire for sport. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 25, 456-476.
- Conroy, D. E., Willow, J. P., & Metzler, J. N. (2002). Multidimensional fear of failure measurement: The performance failure appraisal inventory. *Journal of Applied Sport Psychology*, 14, 76-90.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). Intrinsic motivation and self-determination in human behavior. Plenum Press: New York.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1991). A motivational approach to self: Integration in personality. In: R. A. Dienstbier (Ed.), *Nebraska symposium on motivation: Perspectives on motivation*, 38. University of Nebraska: Lincoln, pp. 237-288.
- Dweck, C. S. (1999). *Self-theories: Their role in motivation, personality, and development*. Philadelphia: Psychology Press.
- Lim, B. S. C., & Wang, C. K. J. (2009). Perceived autonomy support, behavioral regulation in physical education and physical activity. *Psychology of Sport and Exercise*, 10, 52-60.
- McAuley, E., Duncan, T., & Tammen, V. V. (1989). Psychometric properties of the intrinsic motivation inventory in a competitive sport setting: A confirmatory factor analysis. *Research Quarterly of Exercise and Sport*, 60, 48-58.
- Mullan, E., Markland, D., & Ingledew, D. K. (1997). A graded conceptualization of self-determination in the regulation of exercise behavior, Development of a measure using confirmatory factor analytic procedures. *Personality and Individual Differences*, 23, 745-752.
- 村山航 (2003). 達成目標理論の変遷と展望 —「緩い統合」という視座からのアプローチ—. *心理学評論*, 46, 564-583.
- Nicholls, J. G. (1989). *The competitive ethos and democratic education*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Nien, C. L., & Duda, J. L. (2008). Antecedents and consequences of approach and avoidance achievement goals: a test of gender invariance. *Psychology of Sport and Exercise*, 9, 352-372.
- Ntoumanis, N. (2001). A self-determination approach to the understanding of motivation in physical education. *British Journal of Educational Psychology*, 71, 225-242.
- Pelletier, L. G., Fortier, M. S., Vallerand, R. J., Tuson, K. M., Briere, N. M., & Blais, M. R. (1995). Toward a new measure of intrinsic motivation, extrinsic motivation, and

- amotivation in sports. The Sport Motivation Scale (SMS). *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 17, 35-53.
- Standage, M., Duda, J. L., & Ntoumanis, N. (2005). A test of self-determination theory in school physical education. *British Journal of Educational Psychology*, 75, 411-433.
- 杉原隆 (2003). 運動指導の心理学. 東京: 大修館書店.
- 上淵寿 (2004). 達成目標理論の最近の展開 上淵寿 (編著) 動機づけ研究の最前線 (pp. 88-107). 東京: 北大路書房.
- Vallerand, R. J. (1997). Toward a hierarchical model of intrinsic and extrinsic motivation. In: M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, 29. Academic Press: New York, pp. 271-360.
- Vallerand, R. J., & Fortier, M. S. (1998). Measures of intrinsic and extrinsic motivation in sport and physical activity: A review and critique. In Duda, J. L. (Ed.), *Advances in Sport and Exercise Psychology Measurement* (pp. 81-101). Morgantown, WV: Fitness Information Technology.
- Wang, C. K. J., Biddle, S. J. H., & Elliot, A. J. (2007). The 2×2 achievement goal framework in a physical education context. *Psychology of Sport and Exercise*, 8, 147-168.